

昭島礼拝 2020/10/11

聖書：ヘブル 11:39-12:3

主題：信仰生活のゴール

賛美：

みなさん、おはようございます。今日は召天者記念礼拝です。昨年、役員会で 2020 年度の予定を考えているときに、召天者記念礼拝をしましょうという話が出ました。信仰の先輩方を思い、神様を礼拝するときです。ご家族の慰めをお祈りし、また神様にある希望をいただくときです。できれば普段は教会にいらしていない、ご家族の皆様もお誘いしたかったのですが、コロナの影響でそれは難しそうということになりました。

今日は皆様に昭島教会の会員の方々ですでに天に帰られた方々の簡単な紹介をお配りしています。ぜひご覧になって、多くの方々のことを思いめぐらし、思い出を分かち合い、ご家族の皆様のためにお祈りいただければと思います。

今日はヘブル人への手紙を開いていただきました。ヘブル人への手紙 11 章には、旧約聖書に登場する多くの方が紹介されています。ヘブル人への手紙はその題名が示す通り、ヘブル人、つまりユダヤ人、イスラエル人にあてて書かれた手紙です。ですからこのヘブル人への手紙 11 章で紹介されている人々はみな、手紙を受け取った方々の共通の先祖ということになります。日本で言えば、日本史で織田、豊臣、徳川などの話をしているような感覚ですね。自分たちの民族の歴史が語られています。ユダヤ人の場合、日本史を習う感覚と違うのは、ユダヤ人の先祖はみな、神様とどのような関係にあったかということに焦点を当てて語られていることです。日本史では織田が何をしたか、豊臣が何をしたかということに焦点が当てられていますが、聖書がユダヤ人の歴史を語る

上で欠かせないことは、アブラハムは神様とどのような関係であったか、モーセは神様とどのような関係であったかということです。ですから、神様というお方を一本の筋道として、どの時代の人もみんな一本につながっています。いふならば、ユダヤ人の先祖の歴史を語っているのですが、神様の歴史を語っているのと同じこととも言えます。神様がアブラハムの時代に何をなされたのか、神様がモーセの時代に何をなされたのかということです。聖書が語る歴史は、神様の歴史なのです。

ですからユダヤ人の先祖の歴史を語る上で、重要なことは、人と神様との関係、つまり信仰です。ヘブル 11 章ではアブラハムは信仰の人であった。モーセは信仰の人であったと、みな信仰の人であったことが語られます。一つ一つの出来事をあげれば、みな多くの失敗や挫折もしましたけれど、また特に目新しいこともないような日常も多かったことと思います。しかし改めてその人の生涯を振り返ると、それは神様とともに歩んだ信仰生涯であったと言える。と経ブル人への手紙は書き記しています。ですから、そのような人々の生涯を振り返ると、私たちも何を目指して生涯を歩むべきか教えられます。

彼らは何を目指して歩いていったのでしょうか。今日は読みませんでしたが、ヘブル 11:16 にはこのような言葉があります。「しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」彼らは天の故郷にあこがれていました。天の故郷とは天国のことです。神様をご支配しておられる国です。そこにはもはや苦しみも悲しみもありません。だれもが満ち足りて、平和のうちに生きることができます。愛とやさしさと思いやりに満ちた世界です。いつでも、どこにでも神様がおられて、神様と語り合うことができ、神様からの豊かな祝福を受け取ることができます。そして神様の民であるみんなと争いなく、ともに生きる世界です。彼らはみな

そのような世界にあこがれて、この世では苦しみにあつたとしても、天の故郷を希望として耐え忍んで生涯を全うしたのでした。11:29-30にはこのように書いてありました。「これらの人たちはみな、その信仰によって称賛されましたが、約束されたものを手に入れることはありませんでした。40 神は私たちのために、もっとすぐれたものを用意しておられたので、私たちを抜きにして、彼らが完全な者とされることはなかったのです。」この世は天国ではないかもしれませんが。この世の中でもたくさんのうれしいことや幸せといわれることや、ぜいたくなこともあります。しかし同時にこの罪ある世界では苦しみもあります。信仰の先輩方はこの地上においては、決してぜいたくではありませんでしたし、ずっと幸せだったわけでもありません。苦しみ、悩みもありました。この世においてはそれらのものは手に入れなかったのですけれども、後に神様が用意してくださっている完全なものに希望をもって、神様との信仰生活を守り通したのでした。

このようにイスラエル人たちには多くの信仰の先輩たちがいました。そして彼らの背後で働き、彼らの生涯を守り導き、約束の御国へ伴ってくださった神様がいました。彼らはいなくなってしまったのではありません。ヘブル 12:1では「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、」と書いています。すでに天に召されて、この世での地上生涯を終えましたが、ヘブル人への手紙は「雲のように私たちを取り巻いている」と書いています。独特な表現です。すでに亡くなって、過去の人となったのではなく、今も雲のように私たちを取り巻いているのです。ただ精神論的なことを言っているわけではありません。それが神様の救いです。神様は天国で私たちが生きるために、キリストの救いを備えてくださいました。キリストの十字架のゆえに私たちは死んでも生きるのです。永遠のいのちを与えられるのです。ですから今もなお信仰の先輩方は私たちを雲のように取り巻き、後に

は天国で再会できるのです。

昭島教会にも多くの先輩方がいらっしゃいます。先輩方も私たちを雲のように取り巻いてくださっています。私たちは一人で神様を信じようとしているのではなく、みんなで神様を信じています。みんなで神様の約束の御国を受け継ぐのです。すばらしい神様の祝福だと思います。神様の祝福、キリストにある希望です。

ですから私たちは、先輩方に見習って、また励まされて、この地上生涯を歩みたいと思います。彼らは私たちの周りで証をしています。イエス様こそ私たちの救い主であるということを証しています。イエス様を信じて歩めば、生涯大丈夫だし、この地上生涯を終えてもなお大丈夫だと証しています。ヘブル 12:2には「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」と書かれています。イエス様ご自身も父なる神様を信じて、十字架への道を歩まれました。苦しみの中を通りましたが、今は栄光ある父なる神様の右に着座されたのです。私たちの信仰の先輩方も、栄光ある天の御国を受け継ぐものとされました。同じところに私たちも向っていきます。神様がおられ、イエス様がおられ、聖霊様がおられ、信仰の先輩方がおられるところに私たちも行くのです。喜びをもって、希望をもって、この地上生涯を全うしたいと思います。